彼の足跡　私の証明

烈風６０１空

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

寝ている間に死んだ主人公。彼は神様によって異世界で第二の人生を始めることに。

初投稿です。三か月に一回のペースで投稿していきたいと思っています。

学校との兼ね合いもありますが、出来るだけペースを乱さないようにします。

この物語を終わらせるまでは書き綴ります。

初見さん大歓迎。一度見た人こそ見てもらいたい。

２０２０／０２／２５　Ｐｉｘｉｖ様にて試験的導入開始。

２０２２／０３／０１　作品名を変えました。

２０２２年１１月３０日を以て休載させていただきます。

目次

プロローグ
「死」から「転生」 ―――― 1
多分一章　詰み
海上の出来事 ―――― 6
海上の出来事～航行編～ ―――― 12
海上の出来事～発着艦編～ ―――― 16
さらば海・・・だったら良いのに
22
戦闘？なにそれ？ ―――― 27
初戦闘？ ―――― 32
やっと戦闘開始 ―――― 39
戦闘終わり!!？多分!!？ ―――― 44
2章　気付いた？まだ1日しか経ってないことに。
閑話休題と見せかけた重要回にしたかった ―――― 55
久しぶりの主人公 ―――― 62
何にも進まない回（読みにくさを添えて） ―――― 67
やだ！今話の内容薄すぎっ！ ―――― 72
なんか毎回同じ話しをしている希ガス ―――― 77
彼の決意 ―――― 84
RE：START ―――― 90
番外編という名の時間稼ぎ

蒼龍の過去 96
蒼龍の過去2 103
番外編 115

プロローグ
「死」から「転生」

～プロローグ～

「うぁぁ～」

俺はそう言ってパソコンの電源を切った。そして、寝る準備に入る。明日は高校の一学期の始業式がある。そして、俺がさっきまでやっていたのは、友達に誘われて始めた人気のインターネットブラウザーゲームの「艦隊コレクション」通称「艦これ」だ。因みに、大好きな艦娘は金剛だ。（カツコカリ済）異論は認めん!!

ま、そんなことはどうでもいい。寝ることは俺にとって幸せな時間だ。だから、一分一秒が勿体無い。

「おやすみ!」

一人暮らしだから誰にも聞かれないのがいいところ。

だが、逆にそこが悪いところでもある。（強がり）

「ここは??」

気づけば暗く上下がはっきりとしないところに立っていた。
「夢か???」
突っ立っていても仕方がないので取りあえず前へ進む。
服は上下ジャージ。山口県発祥の某衣服店で買った黒っぽい迷彩柄の服だ。そこそこお気に入りの服である。

どれだけ歩いたのだろう。何もなく歩く他なかったため歩いていたが、ふと前方に光が見えた。俺はそこに一体何があるのか気になり走ってその光を目指した。思っていたより近く、すぐに辿りついた。
そこには昭和の戦後のような佇まいで、畳に卓袱台、レトロなテレビなどがある。
卓袱台では男が一人座っていた。
「ども〜」
ソイツはまるで俺を待っていたかのようにタイミング良く話しかけてきた。見た目は二十代半ば。髪がキラキラしてピアスをしている。俺より１０センチぐらい高い。
ただ、
「え?･なに?･むし?･ひどくな〜い?･」
喋りかたがチャラい。まぁ、ほっとこう。

「ここは、どこだ？」
「ここ？ここは神界。神々が住む世界だよ。僕は神で～す。あ、君は死んだよ。」
　なんだこいつ、チャラいな。それよりも、
「死んだ？どういうことだ？」
「そのまんまだよ。君は死んだ。こんな感じに。」
　そう言ってそいつはテレビのスイッチをつけた。それには俺が寝てから死ぬまでをダイジェストで映っている。ざっくり言うと、
　寝る？地震が起こる？棚が倒れる？俺に直撃？死ぬ
　以上!!
「ど～？分かった？君は死んだんだよ。」
「あぁ。分かった。確かに俺は死んだ。」
　認めたくないが事実だから仕方がない。
　親孝行が出来なかったことが一番の心残りだ。
「んじゃ、どこに行きたい？」
「『どこ』って。」
　急に『どこ』って言われても何のことかわからん。
「え？せっかくだから転生させてあげようかなって思って。嫌？」

「お願いします!!」土下座付き
「そこまでしなくてもいいよ。転生は決定事項だし。」
「じゃあ…艦これの世界で。」
迷いはない。
「おけ。君は確か…加岡」
「烈火。加岡烈火です。」
「そうだった、そうだった。んじゃ、チートあげるからガンバ。」
チャラ神がノートパソコンに何か打ち込んでいる。
チートかぁ。どんなのかなぁ。でも、艦これの世界にチートっていらない気がするけど…まぁ、貰っとくか。
「準備できたよ〜。金剛だっけ？君の嫁艦って？」
「はい。」
まさか…。提督かっ！
「だから、金剛以外の艦娘にしといた。
よし。行ってらっしゃい。元気でね。」
チャラ神がそう言った瞬間、謎の浮遊感を覚えて視界が黒色に染まっていく。
え？艦娘？あ、ちょ、待て!!

このチャラ神――!!

たくっ。チャラ神め。絶対に許さん。
「たくっ。ここはどこだ…。」
右、海。左、海。前、海。後、海。上、快晴。
つまり、前後左右、海…。上は快晴。
ええ、いきなり海上かよ。せめて島にしてよ…。そんなことより誰に転生したんだ？
今着ている服を見た。
白い胴着？に青い袴？そして、肩に飛行甲板とおぼしき不思議な材質の板、右手には弓…つまり、加賀型航空母艦の加賀に転生したようだ…。何故に加賀…？

多分一章　詰み
海上の出来事

こんにちは皆さん。私は今、どこにいるでしょう?正解はどっかの海上でした〜。

「つーか、なんで、なんで海上なんだよ!せめて島にしろよ!島に!このチャラ神いい!」

この仕打ちはめちゃ腹立つ。

チャラ神を怨むことにしよう。

チャラ神に対する怒りが静まったところで現状を確認する。

ええと、どっかの海上に一人。そして、『加賀』の艤装一式。艦載機は初期装備と同じ

だろう。
むむ。俺弓道したことがないから艦載機の発艦の仕方出し方が分からん。むっさピンチ。最悪手で投げればいいか。まぁ、それは置いといて。

「ここってどこだよ…。」

今いる場所が分からないと何処へいけばいいのかが分からない。そして、食料もない。
＊艦これをプレイしている人は分かると思いますが、主人公の身体である加賀は結構資材食料が必要です。

～主人公から離れたところ～

？1「遠征ばっかりで疲れたっぽいぃ。」
？2「そんなこと言ったらいけないよ、夕立。」
?!「ぽい？」

？2「夕立？」
？1「何か声がきこえたっぽい！」
？2「声？ボクには聞こえなかったよ？」
？1「でも、確かに聞こえたんだけど・・・。空耳かな？」
＊？を使う必要ないだろっ！セリフで分かる！

～話は戻って～
場所が分からないなら聞けばいい！俺天才かも。
よし、早速聞くか・・・ 誰に？＊知らねぇよ！

「いきなり詰んだ気がする。オワタ。」

こんなときどうすれば・・・ はっ！妖精さん！ピクシーさん！小人さん！に聞けばいいではないか。
＊後ろ2つは何？

「妖精さん、妖精さん、何処にいますか？出てきてくれなければ俺此所で死ぬかも！」

すると、肩の辺りで声がした。そこには2等身に可愛い生き物がいた。これが妖精さんである（ドヤァ

＊どや顔すな

「デハ　シンデクダサイ」
「酷っ！主役が居なくなったら話が進まねぇよっ！」
「ダイジョウブ　ナントカナル」
「何とかならねぇ！」
「デ　ヨウケン　ナニ？」
「マイペース過ぎるだろっ!!」
～色々あって～
「ワカリマシタ」
「本当に分かったのか？」

俺は妖精さんに此処から一番近い鎮守府を聞いていた。あ、今しゃべっている妖精さんは艦載機妖精のトップらしい。名前はハル。由来は季節の春。（決して「アメリカの

ヤツめ」とか思ってないからな！日本にノート突き出したアメさんではないのであしからず。）

俺が区別するために付けた。妖精さんって皆同じように見えるし。

「ワタシタチニオマカセ」

うん。凄く心配。

「それで、どっち向きに進めば良い？」

「トリアエズキタヘ」

「とりあえずって・・・。ハル、羅針盤は？」

「テキニソウグウスル　イチオウツカウ」

クルクル　ピタッ　ふと思ったけど、羅針盤って回したらいけない気がする。

「タイヨウガミギテニミエルヨウニ」

「了解・・・　あ、」

「ドウシタ」

「どうすれば前に進める？」

「エ？エェェ」

そこまでびっくりしなくても良いじゃん。

色々初心者なんだから。

海上の出来事～航行編～

俺は今、航行練習をしております。

「あ、」バッシャーン

また転けた。なんでこんなに難しんだよ。なんか、アニメの吹雪の気持ち分かる…。

ー遡る事約二時間前

腹を割って話してやるって思いハルに包み隠さず話した。

「あのさハル、気付いていると思うけど加賀ではないから。」

そんな一言から始まった俺の昔話。＊長いので割愛

「ーという感じだ。」

「ワカリマシタ。タダナマエヲオシエテクダサイ。」

え、名前？教えていなかっかな？ならば、教えてしんぜよう。ついでに航行の仕方を教えて貰おう。

「あー、俺は加岡烈火だ、烈火って呼んでくれ。」

「レッカサンデスネ。」

「それと、ものは相談だが、俺に航行の仕方を教えて欲しい。」

「ワカリマシタ」
よっしゃぁ！これで移動できる！勝つる！では早速教えて貰おう。
「ソノマエニ、シンデイタダケレバサイワイデス」
「・・・　へ？」
なんか、不穏な言葉が・・・。
まぁいっか、気にせず気にせず。
「・・・　どうすれば進める？」
「マエニススムイメージ」
うん、なるほど、よく分からない。まぁ一応してみるけどさぁ。
「・・・・・・」
何も起きない。騙したな！
「アレェ、オカシイナ。ァ、」
あ、ってなに?!あ、って?!
「ボイラーハタラケェェ」
「ヒェェェ」
「・・・・・・」
うん、察した。なんというか、まぁ、ね？

「頑張れボイラー妖精・・・。」
それだけしか言えない。
～数分後～
「ジュンビカンリョー。」
「分かった。」
えっと、前に進むイメージで。さあ、Ｌｅｔ，ｓ　ｔｒｙ．
・・・　簡単に出来ると思ってた。ここで想像と現実の違いを理解させられました。
ひたすらにコケる。アニメの吹雪のようになる。中でも不思議だったのはいくら海面に衣服が触れても中々濡れない。多少濡れてもすぐに乾く。水を弾いている訳ではなさそう。聞いてみたところ色々と説明を受けた・・・　理解できませんでした。要するにハイパー防水である、衣服だけが。そう、衣服だけが。
俺(加賀)の髪型はサイドテールだ。つまり、髪の長さは長い部類に入る。衣服以外の場所（艤装は除く）は生身の人間と同じように水に触れれば濡れる。そして、先程からこけ続けている俺は髪がびしょ濡れである。
そんなことは置いといて、航行方法も時間が経つにつれてコツがわかってきて転ける回数も減り冒頭に戻る。
「マタコケタ」

「ヨ、コケシン」

五月蝿い、そしてウザイ。さっきから煽ってきやがる。

失敗が在るから成功が在る。失敗だって大切だ。お前らだって失敗するだろっ！（逆ギレ）

髪がメチャ濡れて気持ち悪い。早く乾かしたい。

「あ、」

考え事をしていたら再び転けた。尻痛い・・・。

「ヤーイ」

また煽りやがって。

海上の出来事～発着艦編～

なんとか航行ができるようになり（約2時間半）、次に艦載機の発着艦を教えてもらうことになった。
「シューチュー」
「シューチュー、シューチュー」
うるせぇ。
ー
ーー
ーーー
「よしっ。航行できるようになったから鎮守府目指して、しゅっぱ～つ。」
「チョットマッタ。」
なんでトモ●レネタ出した？それよりもどした？
「カイテキシタラドウシマスカ？」
「……。」メソラ～シ
「目をそらさない」

「戦い方を知らないから逃げる」
「・・・ オォイ、イチバンチカイ　ヒメッテドコダッケ？」
　え？なんつった？今なんつった？姫？＊深海棲艦の姫級のこと
「シラナイ」
「シラナイ」
　なんだ、知らないのか。いや～焦った焦った。
「ジュウゴキログライサキ」
「イタ、ヒメイタ。」
　・・・ 居るの？姫生息？
　クエスチョン、ＬＶ１とチート持ちのＬＶ１が戦うとどうなるでしょう？
　アンサー、チート持ちが勝つに決まっている。
「ごめんなさい、誠に申し訳ありません。すみませんでしたぁぁぁ。」
　ちょ、助けて、流石に此処で死にたくない。お願いします、ハル。どうか、戦うから姫だけは勘弁してっ！
「ウソデス。」
「はっ？」
「ウソデス。」

「嘘？てめえ、なに嘘ついてんだ！死にかけたじゃねぇか！」半ギレ
「ヤーイ」
　煽るなっ！
「ヒメヲメガケテ、シュッパーツ」
「オ～～」
「勝手に話を進めんな！」
妖精(あいつら)さんたち、自由だな。（遠い目）
「モウイチドキキマス。テキニアッタラ？」
　なんでやる気がないの？＊お前のせい。
　答えは決まっている。
「逃げる☆」
「ヒメヲメガｋ「戦う、戦うから姫だけはやめて」・・・　テキニアッタラ？」
「戦う！」
「ドウヤッテ？」
「矢を手で投げる。」
「・・・　バカ？」
「喧嘩売ってる？ねえ、喧嘩売ってんの？（笑顔）」

以下略　不毛な争いが続く

ーーー

ーー

ー

ということがあり、姫と戦いたくないので仕方なく空母の攻撃方法である発艦練習と艦載機の着艦練習をすることになりました。

「ハル、聞こえる？」

［キコエマス］

何とか発艦に成功。初めて成功した艦載機は零戦。

いやー難しかった。正しい姿勢で弓を正しく持って矢を番、放つ。俺弓道したこと無いから弓の正しい持ち方知らない。番方知らない。矢をまっすぐに飛ばせない。矢の引く力が弱すぎて遠くに飛ばせない。飛ばせても矢の速さが足りないから艦載機に変化しない。思い出すだけで気持ちが萎える。でも、発艦出来るように成ったから結果オーライ。

［レッカサン、メヲトジテクダサイ。］

ん？目を閉じる？なんで？あぁ、艦載機とリンクか。オケマル。＊さむっ。

「目を閉じて・・・。」

お？おぉ！凄い、これは凄い。まるで俺がパイロットになったような感じ。違うのは下が海で艦載機に乗っているわけではない。

あ。はしゃぎ過ぎてリンクが切れた。

［チャッカンスルノデ、ジュンビヨロ］

準備よろってチャラいな。それより着艦だ。えーと、飛行甲板を水平にして、端を艦載機に向ける。

おおう、意外に腕痛い。ってどうでもいいか。

流石ハル、艦載機妖精のリーダーらしいキレイな着艦。惚れてまう。＊語調が気持ち悪い。

艦載機は飛行甲板で矢に戻った。

そんなことをひたすら練習しました、何回も完璧に出来るまで。

すると、矢を放つのに大切な知識が頭の中にあふれてきた。何の抵抗もせずその知識通りに体を動かすと俺の想像をはるかに上回る上手な発艦だった。

俺はそれを見たことがある気がした。だが、思い出せない。一体どこで見たのか見当がつかない。ただ懐かしさを感じるだけだった。

ーーーーーーーーーーーー

？「ねぇ、いいの？こんな感じだと彼は何にも育たないよ？」

？「相変わらずあなたはチャラいわね。まぁ、なんて言うか、彼はこの先色々な期待や尊敬を背負うことになるから私からの餞別よ。」
？「それにしては多いと思うよ。」
？「そうかしら？この先のことを思うと少ないわ。」
？「君が言うなら別に。」
？「そう。」
とある場所でとある人達がとある話題について話している。お茶（玉露）を飲みながら煎餅（草加煎餅）を美味しそうに食べている。＊玉露、飲んで見たい！

さらば海・・・ だったら良いのに

航行も攻撃も出来るようになった。ならば、
「しゅっぱーーつ！」
「「「オーー」」」
やっと、やっと３６０度海の無駄に広い海原からおさらばだ。長かった、長かったよ～～。（泣）
＊合わせて四時間強
初めて会う艦娘に期待をして出発した。深海棲艦には会いたくない。だって闘いたくないもん。
＊ワガママやな～。
「ネンリョウノコリ　ヨンブンノサン　グライ」
「は？もう１／４消費した？早過ぎる。」
「カンサイキニネンリョウツカッタ」
「つまり、俺が余りにも発着艦練習し過ぎたと。」
「ハイ」

むむ、どこかで燃料補給しなければ。この辺に燃料落ちてないかなぁ？…　最悪盗むか。＊お巡りさんあいつです

それに、今どこにいるか分からない、羅針盤は深海棲艦のところに連れていってくれそう。航行練習前に回したけどなんか心配になってきた。後、日が沈むまでには島でも見つけて寝たい。空母って一部を除いて夜戦できなかったはず。いい感じの的になる。砲撃とか痛そう。

「ハル、羅針盤を回したら深海棲艦に会ったりしないの？ちゃんと鎮守府に着く？」

「…　タブン」

今の間は何?!むちゃ心配、羅針盤の性能もむちゃ心配なんだけど。大丈夫かな？

まぁ、なんとかなるさ。悩んでも仕方ない。

「どっち向きに進めばいい？」

「レッカサンガ　レンシュウシテイルアイダニ　ナントナクノイチガ　ワカリマシタ。」

「今どこにいるの？」

「タイヘイヨウ　チュウブヨリ　ホクトウ」

フムフム。何でここに転生さしたんだ、あのチャラ神は。＊チャラ神のせいではない。海流のせい。

南方海域周辺が良かった…　島がたくさんあるから。島がたくさんあると燃料が落

ちてそう。ってそんなことある訳ないか。
「じゃあ南南東ぐらい？」
「ソダネー」
…　ネタ古くね？
それってカーリングのあれだろ？
「……」
ほら、この間。どうすんの？
「…　南南東はどっち向き？」
居心地が悪いわ～～。
「アッチ」
あ、そうですか。
うっし、ボチボチいこか～。
目指せ鎮守府！早く鎮守府で楽に過ごしたい！
＊彼は泊地とか警備府だとこき使われそうと思っている。
～数分後～
陸がない～～。島もない～～。船もいない～～。なんにもない～～。
「ハゲ」

ハゲ?げ、かぁ。げ、げ、げ、
「ゲーム。む。」
「ムサシ」
はい、暇なんで古典的なしりとりをしています。・・・　何回も負け続けています。５連敗中。妖精さんたち強くね?
「四面楚歌。か。」
「カ●イ　ジュウニガタ」
「は?なんつった?」
～数時間後～
「ネンリョウ、ネンリョウ。」
え?燃料?うわっ、残り2割切った。早く陸地を見つけなければ。なんか燃料とか弾薬の残量が分かるようになった。なんでだろうね?不思議だ。
「テイサツ、テイサツ」
偵察?彩雲持ってないよ?
「ゼロデジュウブン」
あ、はい。ゼロ戦の弓はどれだっけ?お、これこれ。
「攻撃隊、全機発艦始め!」

「コウゲキシナイ」
「ゼンキダサナイ」
分かってます、ただ言ってみたかっただけだから。＊加賀のセリフではない。
それより早く陸地を探してこい、燃料が、燃料が尽きてまうぅぅ。・・・ 腹減って来た。
「何か食べるもの持ってない？」
「アメナラアル」
飴ねぇ。仕方ない、飴で我慢するか。というよりどっから出した？そんなでかい飴。
妖精さんの半分ぐらいの大きさがあるぞ。
それと妖精さんには２種類存在することが分かった。会話するとき普通に喋る妖精さんと単語を並べただけの妖精さん。違いは役職。「～長」以上の肩書きがついているのが前者、その他が後者っていう感じ。正直、どっちも可愛い。
＊さいですか。

戦闘?なにそれ?

拝啓

皆様、元気に御過ごしでしょうか?私は元気です。すごくチャラい神に艦これの世界に転生させてもらいましたが、まさか艦娘になるなんて想像できませんでした。

それより私はまだ海上です。３０分ぐらい前に島を見つけるために艦載機を飛ばしましたがなにもありませんでした。ただ、残りの燃料が1割をついに切りました。あら大変。

それではまた会う日までお体にお気を付けください。　敬具

×月○日　　加岡烈火

この世の誰か様

「ねぇハル、どうしよう。ついに1割を切ってもうた。このままやったら動かんくなる。」

「カンサイベン　　ワロス」

「ふざけんな!なんで島がないんだよ!!神は死んだ!!!」＊生きてます。

ったく、ずっと風景に変化が無いし島も無い、あげく燃料も底をつきかけている。何

よりもこの身体と艤装。いまだに違和感がある。前世?では平均身長より下をひたすらウロウロしてました。そんな俺が転生したら約１９０センチの高身長になるとかふざけんな!!もう少し低いヤツにしろ!!

＊調べたところ、高２の平均身長は１７０センチぐらい。なので、烈火は１６０センチ後半でよろしく。

「暇だーーーーー。」

「「「ウルサイ」」」

「すいませんっ」

それにしても暇だ。何か起こらないかな～。例えば島が発見されたり、燃料が落ちていたりって流石にないか…。

燃料が切れるまでには島を見つけたかった。

「燃料が切れたらどうなる?」

「ギソウガキエル」

「は?艤装が消える?海にダイブすんの?」

「ヨウセイジルシ　ノ　サバイバルキット」

何だよそのサバイバルキット…。っていうか、島がないからサバイバル出来んぞ。つーか、どかっら出した!?まぁいいや、敵がいないだけマシだし…。＊あ、（察し）

「!!テキハッケン」
　んな馬鹿な。これはオワタ（^・^）
　その前に一息ついて・・・って、そんなことする暇ねぇし。
「敵勢力は!?」
「イキュウニ　チキュウニ　リキュウイチ・・・ヲキュウイチ　ノ　キドウブタイデス
キョリ　イチマン」
　チッ、機動部隊かよ・・。確実に殺られる。燃料ないし。燃料ないし。燃料ない
しいいいいい!!
「ア　テキニキヅカレマシタ」
　・・・もうヤダァァァ。ボク、オウチカエル。＊てめぇ今帰る家ないだろ。
「テキカンサイキセッキン」
　どうしよう。あぁどうしよう。こうなったら最終奥義を使うしかない。
　最終奥義発動!!

……　逃げる!!

「うおぉぉぉぉぉ」

誰かが言ってた。

「逃げるは恥だが役に立つ」と。

だから俺は逃げる!!

逃げて役に立った記憶はないけどな!!（ドヤ

逃げる逃げる逃げる

「うおぉぉぉぉぉ」

「ウエ」

「あ、」

ドカーン

「いてぇぇぇぇ」

ですよねー。走って逃げれる程艦載機は遅くないよねー、あぁ体が痛い。う～ん、服装とさっきの攻撃をみて中破より小破ってとこか、というか中破だね。わぁ艦載機つか

ねぇ、どーしよー（棒）
全く、ままならないもんだぜ。こうなったら、盛大にやってやる。
この俺を怒らせたことを後悔させてやる。
「ハル、最後一発打つぞ、盛大にな。」
「デモ」
「何とかなる、いや何とかする。」
腹をくくったからには後には引けない。なんとしてでも、な。

初戦闘？

「全艦載機、発艦始め!!」

プロペラ機特有の心地が良い低く響く音が鼓膜を揺らす。背中の矢筒にある全ての矢を放った… のだが、

『ムリ』

「あ、ちょ」

ことごとく艦載機たちは海へ沈んでいく。一部の妖精さんはギリギリで発艦成功している。多分発艦成功したのは3割も満たないと思う。

確かに空母は中破したら艦載機の運用出来ないけど艦娘は関係ないじゃん、飛行甲板使わないんだし。使わないんだし!!中破しても発艦出来るし、出来るし!?

＊使います

これでは敵に掠り傷一つ与えられないだろう。ＳＨＩＴ。神様に貰った大切な装備（加賀さん）が!!

＊死ね爆ぜろ

う～む、悩んでもしょうがない。取りあえず発艦成功した艦載機を攻撃させに行かせ

よう!!
「発艦成功したヤツは攻撃開始。その他は帰還せよ。」
「「「「リョウカイ」」」」
なんとなく艦載機に向かって敬礼する。帰って来いよ。
ふっふっふっふ。遂に俺のターンだ!!チャラ神から貰ったチート能力をこんなに早く使うとは思ってもみなかったがこの際関係ねぇ、本気でいってやる!!
さぁ、我チートよ解!放!

…　何も起こらないんですけど!?え?時期尚早的な?時は満ちてない、みたいな?
そういえば、何貰ったかな?
――――――
――――――
「んじゃ、チートあげるからガンバ。」

…　はい、そうでした。チートをあげるとは言われたがどんなチートか言われてなかったぁぁぁぁぁぁぁ。オワタ絶対に死んだ。どうしよ、誰か、誰か助けてぇぇ。

あぁ、もういい。ふざけんな。突っ込んでやる。戦力差？制空権？関係ねぇ。死ぬなら巻き込んでやる!!

ヒャッハァァァァァ!!

あ、

〈あの空母ＷＷ雑魚ＷＷ弱すぎＷＷ〉

〈大破か…　まぁほっとこう。どうだ○○○〉

〈問題ない、作戦に戻るぞ〉

〈え～〉

〈直に沈む。放っておいても害はない。〉
〈おい、やってきたぞ。手はず通りにやれ。〉
《《了解》》

「やっと半分ぐらいかな?疲れたぁ。」
「まだ気を抜かない。」
「は、はい。」
「○○敵は?」
「いません。レーダーにも敵影なし。」
「分かった。そのまま索敵よろしく。」
　烈火と深海棲艦ズから少し離れたところには遠征中の軽巡が旗艦と思われる戦隊が、輸送任務を遂行しているのだろう。輸送船を中心とした輪形陣を展開している。最近何かと物騒ということもあり高練度で装備も充実した艦隊で遠征を実施中である。
「今回は敵が少なめでしたね。」
「帰投するまで集中してください。」
「は～い。っ!!」

「どうしたの?!」
「艦載機より入電、ヲ級を中心とした機動部隊発見。なお、艦載機を発艦したもよう。」
「うげぇ～。ここに来て敵発見とか・・・。」
「ごちゃごちゃ言わない。夜じゃないのが残念だけど、行くよ。」
「ねぇさん、それ一応私のセリフなんですけど・・・。」
「×は輸送船を頼んだよ。」
「はいはい、いってらっしゃい、任されました。」
「無視ですか。」

「む、こちらに気づいたもよう。どうする?」
「構わん。そのままだ。」
「はいはい。あ、さっき攻撃した艦娘が艦載機が放ったから知らせとく。」
「ちょ、なぜ黙ってた?!」
「報告?ナニソレ?（笑）」
「後で折檻な。」
「すみませんでした。」
「む、やって来たぞ。」

「フッフッフ、愚かなヤツラめ。」
「お前も十分愚かだけどな。」
「あぁ?」

軽巡二隻と駆逐艦一隻の分隊は圧倒的戦力差をものともせず敵を攻めにいく。
「敵は?」
「このまま真っ直ぐ!!」
「了解。」
水上を駆ける三人の戦乙女、彼女らは何時も死と隣り合わせである。これは現実でありゲームではない。つまり、大破ストッパーなんてない。辺りどころが悪ければ一発で死す。
遥か遠く黒い塊が見えた。それが深海悽艦というのは言うまでもない。深海悽艦ズは単縦陣、艦娘ズも単縦陣。そして反航戦だ。
深海悽艦は重巡が先頭で六隻だが空母の護衛で実質二隻で砲雷撃戦を行う。まぁ、航空戦力があるんで大丈夫です。
艦娘は軽巡先頭の三隻。航空戦力は期待出来ない。
結果は一目瞭然だった。深海悽艦の方が優勢なのにアイツがあんなことをするか

ら
ー

やっと戦闘開始

深海棲艦の砲が光った。先頭の重巡リ級だろうか、射程距離が長い。ただあまりにも距離が長い為簡単にかわすことが出来た。砲撃をされ黙っている程艦娘は優しくない。すぐさま相手との距離を縮め砲を構える。旗艦の小口主砲――１５．２センチ連装砲が火を噴いた。着弾するがそこに深海棲艦はいない。

「おっしぃぃ」

「全然おしくないです!!」

惜しいとか言っているが、着弾した弾は敵横１０メートルぐらいに落ちたのである。うん、全く惜しくないね。

互いに砲撃戦を重ねて近付く。ところが、

「うっ!?」

「どしたっ！」

「機関部に異常が発生、速度低下。」

「調子は？直りそう？」

「直せそうです。」

「ねぇさん、そろそろ危ないです!!」
敵まであと一歩のところで突如異常が発生。なんとか手を二人を引っ張り、射程外に出ようとする。しかし嘲笑うが如く砲弾が降り注ぐ。お互いに射程内にいる状況で速度を落とすのは狙ってください、と言っているようなものだ。
いくら装備が充実していても当たらなければ意味を成さない。艤装の不調も自己責任。艦隊メンバーは一蓮托生。みんなで助け合う。
「うっひゃー、今のは危ないね。」
「全く、少しは周りを見てください、私が旗艦ということを分かってますか?」
「細かいことは気にしな〜い」
「細かくないです。それより、艤装の不調ですか・・・。」
砲撃や波の音が声をかき消してしまう。また、雨霰の如く降ってくる砲弾や時よりやって来ては帰っていく艦載機を回避しなければならないため、ほぼ統率は取れていない。何とか声を掛け合うのがやっとのことだ。
「ちょっと待って。そんなことよりあれらどうすんの?」
「どうすんのって、ねぇさんが無容易に飛び込むからでしょ?」
「アハハ、そうだった。あ、そうそう機関部直った?」
「は、はい。今直りました。」

「しっかりしてください…。この任務は「いくっよー、丁字戦法ゴー」人の話を聞いて欲しいものです。あと、丁字戦法は無理です。」

輸送部隊に残してきた仲間の為にも早目に終わらしたい。その背景には彼女達の任務の重大さがある。

今回の遠征、少し不思議に思うかも知れない。高練度、高装備。タンカーの大船団。これらから言えることは、そう、資材がなんかもう凄いことになっている、ということだ。

「主砲いっけぇぇ!!」

「当たりなさいっ。」

「仕方のない編成ですね…。さて、私も行きますか。」

周辺に水柱が立つ。潮を被る。途中から参戦した航空部隊のお陰もあり不利なのは変わりないが艦載機による攻撃が減った分自分の戦いを出来ている。水雷戦隊特有の夜戦カットインは不可能だけど…。

「敵駆逐イ級二隻撃破‼?」

「了解、うわっ⁉?……　危な～。セーフ。」

「ねぇさん、こちらは雷巡チ級撃破しました。」

「みんな頑張れ。リ級固すぎて草。」

三人でなんとか対抗する。早々に駆逐を撃破し、軽巡1隻を手間取ったものの軍配は艦娘に上がった。残り空母と重巡と軽巡1隻ずつの計3隻。もっとも艦載機の消耗率は艦娘側が高く少しずつ敵に制空権を奪われている。

そして、ついに制空権を喪失した。

「すみませんっ‼?制空権を失ってしまいました、なんとか対抗していますが長期戦になれば無理です‼?」

「そうですか……、では、出来る限りのことをお願いします。」

わかりました、ただそれだけのことなのに口からその言葉が紡げなかった。

彼女はその場で自分の無力さを感じていた。

ーーーー

ーーーーーーー

「おい、どんどん沈んでいるぞ‼?大丈夫なのか‼?」

「あぁ、心配すんな、大丈夫だ。奴らの方が劣勢なのは明らかだ。輸送船は2隻沈めたがダミーだった。」

「な、なるほど。分かった、作戦を続行する。」

ーーーーーーーー

ーーーーーー

ーーー

「今、はぁはぁ、チ級、はぁ撃破しました、中破までは、ゲホッ……　はぁ、いって、ません。」

「了解、今向かいます。」

チ級の魚雷により致命傷まではいかないが結構な被害を受けた。残るは空母、重巡のみ。

敵空母は小破、重巡は中破手前といったところだ。それに対しこちらは小破2隻中破手前が1隻であり制空権を失っている。

「あぁ～、もうやだ～、リ級固すぎる～T＿T」

「ねぇさん、頑張って、ん、私たちはヲ級相手にい、戦っているのでっ‼?」

「はいはい、うわっ、危なっ！ふぃー、焦るねぇ。」

喋りながらも砲撃し、航空攻撃を回避する。そろそろ弾薬が尽きる。

戦闘終わり‼?・多分‼?

「そっちに魚雷!」
「は、はい!」
「相変わらず鬼だね。姉として恥ずかしいよｗｗ」
「あ、ねぇさん、死んでみます?」ニッコリ
姉に対して冷酷な発言をする妹……恐ろしや。
と、呑気に考える暇もなく艦載機と砲弾のありがたみ皆無な雨。艦載機が多勢に無勢な状態。尚且つ、弾薬がピンチ。鎮守府の資源も枯渇まではしていないが、最低限の補給だけで遠征を遂行中であり、決してブラックではない。もう一度言うが、ブラックではない。
そんな中で重巡と空母を相手として迎えるのは喜ばしいものであろうか。むしろオワタ。
「あぁ～、重巡硬いよ／（＾ｏ＾）／やっべ中破した。」
「え?支援の必要はない、ですか?分かりました。」
「ちょっと何言ってるか分かんない……。」

「先輩の自業自得です。」
「中破したのに、酷くない⁉?」
後方からの迎撃が無ければ艦載機による航空支援もない。
これは「現実」であり、「ゲーム」のようにターン制で交互に攻撃する訳ない。そんなことは知っての通り。相手に蹂躙されても舐めプしても文句を言われる筋合いはない。
「ねぇ、空母まだぁ?重巡倒すの手伝って。」
「後少しなので!頑張って!耐えてくださいっ!」
「ぶー（ｃ・ω・、）」
とか言いながら長女が1番の練度を誇るのだが。
後方のタンカー護衛チームは何とか敵艦載機からタンカーを護っているが、すでに5隻やられた。内1隻は油槽船であるため手痛い。
油槽船から漏れ出た油に火が点き、海面が燃える。煙が黒く立ち登っているお陰で艦載機の進行が収まっている。
「今のうちに艦載機を。」
「全機、発艦始め!」
あたふたはしていないが驚きを隠せないでいる敵。そこに向かう元大空の覇者（ゼロ）。14、5機程撃墜し3機の喪失。全体からしたら微々たるものだが敵を減らすことが出来

た。

灰色に染まる空、赤々と光る海。海と空の間は黒く燃えている。頑張って母港に帰らなければならない。待っている提督のために。

――――――

――――――

「ちょっと、死にそうなんだけど⁉?」
「実は物凄く言いづらいけど、」
「けど?」
「死んだ。」
「くそやろぉぉ‼?」
「最後まで足掻くぜ、そして撤退‼?」
「ざけんな!」

――――――

――――――

戦闘開始から約１０分ちょい。やっとの思いで重巡、空母共に中破。イェーイ。
敵は手痛い一撃により撤退。
「ねぇさん、敵が撤退します、追撃しますか?」
「私にそんな権限はない！旗艦はそなただからな。」
「いや、弾薬が足りるのかな、と思って。」
「もちろん。」
「足りない、と。」
「……　特型は足りてる?」メソラーシ
妹からの言葉が胸に突き刺さる姉。咄嗟の話題転換は魚雷の速さを上回る。魚雷の速さ?知らん‼?
「少しはあるわ。」
「だって、無理だよ♪」
「はぁ、ねぇさんは。まぁいいです。追いつけそうにないので。」
「あるって言ったのだけれど……。」
無線で通信している間に深海棲艦は去っていった。
「では、皆さんが待っているので速く戻りましょう。」
「いや～、今回はちょこっとだけ頑張った。」

「相変わらず先輩は夜が大好きね……。」

『敵艦隊、去リ』

艦載機からの打電で護衛陣も敵が撤退したことを知る。

なんとか耐え凌いだ、ということもあり安堵と疲労が混じっているようだ。

「みなさん！敵艦隊が撤退しました！」

「や、やっと終わったぁ～～。」

「終わりましたね、提督さんに連絡をしなくちゃ。」

――――

――――

――――

「なぁ、アイツら、本当に我々が撤退したと思ってんのか？」

「恐らく。追撃してこない、ということはそうだろう。」

「ふっふっふ、後悔するがいい。」

――――

――――

――――

「最後の最後で敵が強すぎて泣くぅう。」
「やっと帰れます～～。」
「お疲れ、あと少しの辛抱ですからね。」
今回の戦闘により出た被害は船団中五隻と中破二人、小破一人。他は軽微であるためだいたいA勝利ぐらい。
その後、戦闘で足止めをくらった分を巻き返すために足早に去っていった。

ところ変わって烈火氏が放った艦載機たち
時間軸でいうと戦闘が始まる数分前。
母艦から敬礼されたので全機、答礼をしながら母艦の周りを一度回った。
隊列を組み、前へ進む。
交戦している艦娘たちまであと4分の3のところで訃報を聞いた。
『燃料、空ナリ』
遂に恐れていたことが現実となった。
普通、艦娘は艦隊を組んでいるため簡易的な洋上補給をして耐えるが、烈火君は一人である。まぁ、そういう訳だ。
燃料が無くなるとどうなるのか。

ご存知の通り、艤装が消えます。（尚、艦載機は含まれない）
そして、彼は知らない。
空母が燃料倉庫とは別に燃料を保持することができ、今、持っていることを。
『我、帰還セントス』
まだ距離が遠くないため艦載機は一度戻ることを決心する。
今まで飛んできた空を戻る。
急速旋回などの芸当はできないので大きな半円を描く。
少しずつ上昇しながら帰る。燃料を少しでも節約しなければならない。
まっすぐ、最短距離で飛ぶ。島の1つさえ見えない。雲が後ろへ流れる。
そして⊠恐らく⊠烈火がいた場所に帰ってきた。進んだ方角と速さで割り出した場所だがそこに彼はいない。
妖精さんは烈火を探すことを諦め、戦闘中の艦娘を助けるべく再び空を駆ける。
彼は……　どこへ……？

「じゃあ、そろそろ攻撃するか」

「復讐の時間だぁぁ‼?」
「ルールなんて関係ねぇ、沈むまでがゲームだぜ‼?」
帽子みたいな艤装?の口が開き艦載機が発艦され、艦娘に向かい飛んでいった。
今までの遅れを取り戻すために焦っていた艦娘たちは索敵を怠り、ひたすら前へ進んでいた。
深海棲艦の艦載機がはるか上空、雲に紛れて近付いていることも知らず。
おおよそ、２０後半の艦載機の群れは艦娘に気づかれないように２つに別れた。
艦攻と艦戦部隊と艦爆と艦戦部隊だ。
艦攻は海面ギリギリを艦爆は雲の上ギリギリをいつでも攻撃出来る体制で飛んでおり、攻撃の合図をウズウズして待っている、アレがウズウズするのかわからないけども。
艦攻部隊が動いた。最高スピードで近づく。
それに続き艦爆も爆撃体制に入る。
艦娘の一人が艦載機の存在に気付き、機銃を掃射し、次々と撃ち落とす。零戦が襲い掛かる。一機、また一機と落ちていく。
そして、機銃の洗礼をくぐり抜けた艦攻が魚雷を放つ。上からは艦爆が爆撃をする。それらを皮切りに攻撃が激化。艦娘は護衛をしながら、という格好の獲物。だが、防空に当たっている機体が性能を練度でカバーし仕留めている。それでも先の戦闘で多く

の損失を出しているため躱すのは難しいことではない。
攻撃し終わった艦載機から順次帰還。
そして、たまたま、ワンテンポ遅れた最後の艦爆が爆撃した、その攻撃で事件は起こった。

艦娘側は油断していた。早く帰投することに意識が向き過ぎていたようだ。お陰で敵の存在に気付くのが遅れた。気付いた時には艦攻がすぐ近くまで近づき、雷撃していた。慌てて対空射撃をするもの後手に回ってしまい思うようにいかない。弾薬も尽きかけで、航空戦も満足に出来ない。
攻撃が終わった艦載機が次々に母艦に帰還するため、少しずつ敵が減って来ている。弾幕は薄く、あまり意味を成し
てないようだが、しないよりは多少マシだろう。
爆撃が船団中央右に2発と先頭付近に3発ほど降りかかった。
雷撃は5，6線程でまばらである。それでも、貴重な二隻を失った。幸い、他の護衛船に積荷を移し替えることが可能だったので移し替えた。

そこで例の攻撃である。
誰もが全ての艦載機が去ったと思っていたときだった。
誰もが安心して気が緩んでいた。
古くからの言い伝えでもあるように「慢心、ダメ、絶対」なのに慢心をした。だから、たった1発の爆弾は1人の駆逐艦の艦娘に向かって落ちていった。
絶体絶命。四面楚歌。我田引水。天下泰平。臨機応変。虎視眈々。担々麺麺。四字熟語。
ゆっくり落ちる爆弾。周りの景色が歪む。
1秒がものすごく延ばされる。
そんな時でも、神は見捨てない。
どこからか、低いプロペラ音を響かせやってくる。
太陽の光を反射し、赤く光る機体。
放たれた銃弾が爆弾に吸い込まれるように近づく。
一人の神をも超えた存在により。
銃弾が爆弾に命中。爆弾は四散する。
鉄屑がパラパラと落ちてくる。
だって、この世界は

ご都合主義だから‼?‼?

2章　気付いた？まだ1日しか経ってないことに。閑話休題と見せかけた重要回にしたかった

もし、「死」が目視できたなら、人は美しく生きることが出来ないだろう。「死」が見えないからこそ懸命に足掻く。病や衰弱死など、の「死」を受け入れる。

だが、死ぬはずだったのに死んでいなかったら？

本来、「事故で死ぬ」ことが確定されたのに⊠事故に遭わなかった⊠

簡潔に言えば⊠なにかしらの異変が起こってしまった場合⊠である。

彼は無意識に実行し，無知故に自身のイレギュラーの度合いがわからなかった。

ーーーー

ーーーーー

吹雪は困惑していた。

自分は死ぬ筈だった。遠征中の戦闘によりそこそこの傷を負った。敵は撤退し，なんとか沈むことは免れたが敵の撤退は嘘であり，スキを突かれ艦載機の猛攻を受けた。その際の攻撃により大破。そして，不幸にも不可避の爆撃を受けた。

少し話しをしよう。彼女は戦いの最中に命を落とすことを理解していた，いや，知っ

ていた。

彼女はそれを彼女が初めて着任した泊地の提督に言われたことだ。今は亡き提督だが，彼は死期を視ることが出来るそうだ。詳しいことはよくわからないが，そういうことらしい。

日付を当てる程精度は高くない。でも月単位ならギリギリまで分かる。そんな能力で，生まれつき持っていたらしい。

三行で説明しよう。

その提督曰く「今月（現時点）死ぬよ」

本日，月末の午後（設定）

吹雪「なんで生きとんねん？」

不可避の爆弾は当たることなく破片となり散らばる。不可避なのに当たらないとはこれいかに。

話しを戻そう。

「大丈夫⁉吹雪‼」

真っ先に川内が駆けつける。少し遅れ、由良が近づいた。旗艦である神通は船の損傷を見て回っている。

「な，なんとか生きてます」

「良かったぁぁ，沈んだらどうしようって思ってたよ～～」
「本当に大丈夫ですから，頭を撫でるのをやめてくださ～い」
「やだやだ‼?」
吹雪は抱きつき頭を撫でている川内に止めるように言うが一向に止める気配がしなかった。どうしようもないので由良に助けを求めるが，「頑張れ」と目で語っていた。
～由良先輩ぃぃ!?流石にそれは無いのでは!?～
～吹雪ちゃんは迷惑を掛けたから拒否権はありません～
吹雪はなすがままに川内による攻撃が続いた。しゃーなし。
撫でられること数分。吹雪は窶れ、川内はキラ付け完了。
「いや～、悪いね～、吹雪。ちょっとだけ熱が入っちゃった。心配させるからだよ。」
「そうよ。吹雪ちゃんが私たちを心配させなければ良いだけの話しよ。」
先輩からの厳しい?言葉を貰ったがありがたみを感じないのは何故だろう、と心の中で首を傾げたのは言うまでもない。
「そろそろ行きますよ～～。」
遠くの方から神通の声がする。船団の損傷を見終わったのだろう。
「川内さん，吹雪ちゃん，行きますよ。遠征中ということを忘れてないよね?」
「「……」」

由良の言葉は両者のクリティカルヒットした模様。
「先に行きますよ?」
由良はそう言い残して隊列に戻っていった。
「私たちも行きますか。」
「……そうですね。」

「ご心配をおかけしました。」
吹雪は隊列に戻るやいなや、自身の失態を詫びた。
誰一人罵らず，謝罪を受け入れた。
「今回は運良く助かったとしても，次回同じことが起こるとは到底思えないので，帰ってから鍛えて直しですね。覚悟しなさい。」
「はい‼?」
どうやらこの神通さんも，鬼教官のようだ。ガンバレフブキ。
――――
少し時を遡り，神通が輸送艦の点検をしていた頃。
瑞鳳はなんとなしに敵がいた方向を向いていた。
敵の跡は遠くて見えぬ。

「はぁ、もっと練習しなくちゃ……。」

今回の戦いで制空権を獲得できなかったことは目を瞑っても，仲間に爆撃機が飛来した時点で，瑞鳳にとって，悔しい。

《ワレ　チャッカン　ヨウ　モトム》

「うひゃぁ!!?」

あまりにも独り言に没頭し過ぎて，変な声が出てしまった。

《コチラ　ネンリョウ　タリズ》

「えぇ～と，《ソチラ　ショゾク　シラセタマヘ》」

《ワレラ　カガコウクウタイ　ケイ廿五キ　ナリ》

瑞鳳は，恐らく先程助けてくれた艦載機だと当たりを付けた。

だが，先の戦いで少しばかし格納庫に余裕があるといっても，２５機も格納できぬため，思案している。甲板に括り付けることも出来るが，恩人？恩機？にそのようなことかできるほど，彼女は図太くない。

「《カクノウコ　アキ　スクナシ　ロテンデモ　ヨヒカ》」

《カマワヌ　シキュウ　ムカフ》

瑞鳳は格納庫の中の艦載機を整理し，スペースを確保する。だが，どうしても数機は括り付けることになりそうだ。

「妖精さ～ん，お仕事入りましたぁ」

呼びかけると，艤装のあちらこちらから妖精さんが出てきた。

ワラワラと持ち場に着き，着艦の準備をしていく。瑞鳳は西を向いた。

太陽は西に傾き逆光となりて，とても目を開いていられない。

揺らめきながらその姿が，ピンボケが直るように，鮮明になる。

プロペラ音が近づいている。背中に付けていた甲板を右肩に設置する。瑞鳳は現状、飛行甲板が無いため妖精さんが簡易的なものを瑞鳳の艤装に取り付けている。中々使う機会が無いものの瑞鳳は律儀に持ってきている。真面目だ。

少しずつ音が大きくなる。右腕を水平に持ち上げる。艦載機の高度が少しずつ下がり，着艦の準備が完了する。

一機，また一機と瑞鳳の甲板目指して着艦する

と、見せかけて、墜落。残念ながらその手前で燃料が尽きたようだ。

ボチャン，ボチャンと音を立てて海にダイブ。

「あぁぁぁ!?」

本日二度目の瑞鳳の叫び。まぁ，うん，ね？そんなこともあるよ。

久しぶりの主人公

眼に水面が映る。少しずつ水面から遠のく。艤装が外れ，深淵へと至る。
冷たい水の中で無意識のうちに手を伸ばす。身体に渦巻く負の感情と正の感情。
あぁ、たった一日。たったの一日だ。俺がこの世界に来てたった一日で死んだ。力なく伸ばした腕で掴めるものなんてない。実に無力だ。意気揚々と見縊っていたようだ。本当に情けない。
水の中にいるのにも関わらず苦しみがない。
次は……もっと……平凡で……ーーーーーな世界に――――
なんて，様だ……。
「あぁ，全くクズだよ，君は。」
そんな声が聞こえた気がした。意識を手放した。
ーーー
ーーーーー
ーーーーーー
穏やかな死を覚悟した。しかし，死は訪れることなかった。というより，死とはなん

だろう。一度「死」を体験しているが，それは言語化し難い感覚だったような気がする。記憶が朧気になっているようだ。

いつまでも落ちているような，そうでないような不自然な感覚に耐えられず目を開けた。

そこは闇が存在した。見えている／見えていない，どちらも正しく，異なっている。この空間には〝面〟が〝ない〟。足元が覚束ないため上手く歩けない。いや，俺は立っているのか？永久に落ちていると錯覚しているとも取れる。

「久しぶりだね，烈火クン」

「誰だ!!？」

不意に声が聞こえた。

聞いたことがあるような声だが心当たりがない。周りを見渡しても闇が支配しているだけで変化はない。

「忘れているのかい？仕方がないか。一期一会，というものだからね。帰ってくるの早い気もするが，まぁ，許容範囲内だ。」

「何を言っている？」

俺はこの声が言っている意味がわからない。戻ってくるのが早い？許容範囲？なんだ，それは。

「君に見て貰いたいものがある。それまでを案内するのがボクの仕事だ。そこからは別の人がキミを案内する筈だ。それでは、ごゆっくり。」
「は?・ふざけんなよ‼?・ちょっと待てよ、一体どういうことだ説明しやがれ!」
声を荒げるが、なんの返答も返ってこない。
すると、落とし穴に落ちたような、足元が急に無くなったような感覚に囚われた。
足元から光が満ちて、あまりの眩しさに俺は腕で目を覆った。
光が少しずつ収まり、腕から目を離した。そこはさっきとは打って変わって真っ白な世界だった。
黒過ぎるのも、白過ぎるのも、難儀なことと考え、周りを見回した。自分の体すら認識できない。
「はじめまして。もっとも、既に知っていると思うから自己紹介は省かせてもらうわ。」
さっきまでの声より高く落ち着いた声だ。何故だ?・記憶にある声なのに、名前が出てこない。頭に靄が掛かっているとは、今この状況のことだろう。
「今からあなたに見て欲しいものがあるの。拒否権はないから。」
また命令か。さっきの声もこの声も、正体が掴めない。というより何を見ろと?・こんな視界だと何も見えないに違いないと思うが・・・、音が聴こえる。水が激しくぶつかるような音が。

音だけか？感覚を研ぎ澄ませ。頭に掛かった靄が一気に晴れる。
僅かに香る、潮の匂い。この音は、そうか波か。ならば海を見るのか？いやもっと考えろ。海を感じる、且つ船だ。俺に関係しているのか。それとも「加賀」に関係しているのか。ダメだ、情報が足りない。
目の前がさらに明るくなる。共に波も近づく。一際大きな波音が聞こえ辺りに音を残した。
気づけば波一つ立ってない水面が広がっていた。先程の波は嘘かのような漣すらない、そんな海。
障害物は何もなく、果てが曖昧になっている。太陽がないのに明るい。
「なんだ、ここは。」
何もない。３６０度、何もないのだ。改めて自分が置かれている状況を確認してみた。
謎の声２に言われてここに来た。今の服装は生前？よく着ていた部屋着である。貴重品の類はなく、裸足で海にいる。なんとも不思議だ。
例えるなら、塩がないウユニ塩湖だ。もしくはオケアノス、果ての海。
歩くことはできるようなので取りあえず歩いてみた。何もない。振り返ると歩いてきた水面に波紋が浮かんでいる。ゆらゆらと、止まることを知らないのだろうか。

唐突に足元が揺れた。

「おっと」

同心円状に漂う波は互いに打消し、合わさりながら足元から離れていく。後ろを振り返ると、船が一隻ゆっくりと何かに導かれるように進んでいる。

見上げると黒い船体に大きな甲板があった。

「なるほど、ここは心象世界か。一体俺に何を望んでいるのか、謎の声2、いや『加賀』よ。」

何にも進まない回（読みにくさを添えて）

艦これを、提督をしていて不思議に思うことは多々ある。しかし、多くの場合、不思議に思うだけで解決しようせず、いつのまにか忘れてしまう。今の俺のように。

今、目の前を通過している鋼鉄の船。その大きさは言うまでもなく、それ故足がすくんでいる。俺は目の前を通り過ぎるのを見ることしかできない。

そんなバカな、とか思うだろ？本当に足がすくむんだって！全長１００メートルの鋼鉄が目の前を通っているんだから、怖いわ！

俺が生きた世界軸だとこんな船が可愛らしい娘になるとか……、日本人は変態か？いいぞ、もっとやれ。

海に浮かぶ飛行場は俺の前を通り過ぎ、前に進む。そして波紋を残し、見えなくなった。俺は見えなくなる瞬間まで、否、見えなくなってからも、その後ろ姿を眺めていた。何か忘れ物をしているかのように、後ろ髪を引かれるように。

「なんだったんだ、あれ。」

なにを見ればいいのか、とんと検討がつかない。この真っ白な世界に見るべきことなんて無いだ、っ!?

あまりの驚きに、バシャッと水面に尻餅をついた。

人が目の前にいた。ポンチョのような白い布、欧米の貴婦人たちが葬式のときにするような黒い顔隠しをしているヒト。

周囲を見渡したところ、目の前にヒトが立っているのである。それはもう、ホラー。不運が連続している。シルエットが不確かであること、それが一番恐ろしい。

予想外の事態に口が回らず、☒え☒と☒あ☒しか出ない。

なんとか距離を取ろうとするが、腰が引け、水飛沫をバシャバシャたてるだけでほとんど下がっていない。

白い姿のそいつはジッとこちらを見ているような気がするが、動こうとしない。

「な、なんだよ。お、お前は、な、何者なんだよ！」

表情は読めず、その視線は本当に俺を捉えているのか定かではない。出した声はもちろん震え、噛み噛み。上がっていることは嫌でもわかる。

互いにすぐさま動こうとはしない。長い間見つめあう。とても長い沈黙のように思えた。

「ひっ！」

先に動いたのは、相手。一歩一歩近づいてくる。俺には、その一歩が死神に、その足はとてつもなく大きく感じられた。恐怖で足が言うことを聞かない。俺は近づいてく

るのを眺めるほかなかった。
ソイツは手を俺の頭部に向け伸ばす。反射的に目を閉じた、この先に起こる痛みを覚悟して。
しかし、痛みはやってこない。不思議に思い、恐る恐る目を開くと、手が額の前で止まっていた。
その手の形は、まさか！
激しい痛みが額を襲う。デコピンだ。空気を裂く音と共に繰り出された指はめちゃくちゃ痛い。
「何すんだよ！」
立ち上がり相手の胸元を掴むより早く距離を置かれた。さっきの恐怖心は唐突なデコピンによる驚愕に上書きされた。中途半端に伸ばした手がなんとも間抜けに見える。
目の前の存在はヒトではない。少なくとも、俺が知っている範囲内だとしたらだ。17年で何を知っているというのか。
「ここは、有り得ざる世界。」
頭に直接響く声。軽いハウリングを起こし、声の波長が不安定だ。
「誰かの足跡。誰かの歴史。」
クッソ、正体が全然わからない。誰なんだ。

淡々と紡がれる声が余りにも冷たく、気が狂う。

「そして、あなたの未来の可能性の一つ。」

地面の感覚が無くなり、視界がぼやけ始めた。また連れて行かれるのか⁉？次は何処だ⁉？

「さぁ、ここからが本番よ。しっかりなさい。」

あぁ、もうっ！次はどこへ飛ばすんですかね‼？人をさっきからポンポン飛ばしやがって。

地面の感覚が。後一段あると思った階段を踏み外す感じがするのはどうにかならないのか。視覚は使えないが、感触は硬いからコンクリートだと思う。視界に色が戻ってくる。青と白、そして黒い塊。まだ良く見えない。あと、風を感じる。強くなく、凧が程よく上がりそうだ。地面はコンクリートと言ったがあれは嘘だ。

そして、俺は今どこにいるのか。それが重要である。戦場とか溜まったもんじゃない。

周りをキョロキョロすると、己が置かれている立場は不明だが、なんとなく場所はわかった。

あぁ、なるほど。なるほど。そうか、そういうことだったのか。いやぁ、安全な場所でよかった、よかった。周囲に危険物はないようだ。これでそう簡単には死なない。元

から俺死んでるやーん。ハッハッハ。

ただ、船の上というだけを除けば安全という話しなんですけどね。むしろ船ではなくて空母なんですけどね。加えると周りには艦隊がいるんですけどね。（ヤケクソ）

やだ！・今話の内容薄すぎっ！

私は烈火！なんやかんやあって転生したはいいけど、何も出来ずに海のもずく（??藻屑な）となりました！ワタシはーコレカラー戦場でードンパチシマース。知らんけど。

俺に安全な世界ないの？・人生ハードモード？楽して生きたいのが人間。俺は人間。よって俺は楽して生きたい。

はて、俺はここで何をすれば戻れるの？・ずっと立っているのも疲れるのでとりあえず甲板の縁に座る。甲板から投げ出した足をブラブラさせる。服装は変わらず黒っぽい迷彩柄のジャージ（長袖長ズボン）そして裸足。若干寒い。

波を立てて進む艦隊。だが、その一隻にも生気というか覇気というか、こう、心ここに在らず、みたいに感じる。

真っ青な空、白い雲。まさに快晴。水平線の先には何もなく、移りゆく雲は風に煽られ形を変える。

それから数時間ぐらい経った気がする。そして、気がついてしまった。太陽が一向に傾いていないことに。一向に太陽が傾かないのだ。最初は俺の勘違いだと信じていた。まさか、太陽が動かないとかある？・と思って、気の迷いと処理していたがここまで来る

と認めざるを得ない。白夜？極夜？あの、一日中太陽が出ているやつ。アレが起こるハズがないから、いよいよ☒今いる場所というか空間っておかしくね？☒ということで考えるのを辞めた。辞めました。

することもなく、暇で仕方ない。いつのまにか俺は甲板に仰向けになっていた。

その後しばらく俺の記憶がない辺り、寝ていたのだろう。

ブーンという遥か昔にどこかで聞いたことがあるような、ないような、そんな音でやっと意識がログインした。

目の前に、なんだこれ？なんで私はむさ苦しい漢に踏まれているのかね？踏まれているというか、足が体を貫通というか、あの人間が幽霊に触れられない感じ。この場合、俺が幽霊な訳でありまして。

よっこいしょと、立ち上がり現状確認。俺を踏んでいたおっちゃんどもは軍服を着て旗を振っていた。それを合図に艦載機が動き始める。甲板は凄い熱気でやる気に溢れていて何事かと。

飛行機乗りの方々（特に若いの）は、俺でもわかるくらいに緊張していらっしゃる。如何にも熟練パイロットですって奴はいないが、数名佇まいが違う。例えるなら、ガン〇ムの赤い彗星。そんな方は不敵に笑っていて、ぶっちゃけ引いた。

俺は自分自身が観測されていないことを良いことに艦載機の間を縫って現状確認を

行う。

まず、俺に関してだ。ここで何かしらの役割があるらしいが、役割は知らないのでパス。次に船に関してだ。今、俺がいる船の艦種は空母。大きさから正規空母だと思う。なお、大きさは目測です。周りの船は駆逐艦と思われるものから戦艦まで幅広くいる。なんでわかったか?そんなの大きさと勘で判断した。あとは今、現在の話し。艦載機が何処かに飛んでいっていることだ。どこに向かっているのかねぇ。

まとめ

1俺は何か役割を持っている

2艦隊は何か（多分、米）と戦っている

3役割を終えると帰れると思う

暇。

現在、我が艦隊は霧の中を航行中であります!真っ白。5メートル先が辛うじて見えるかどうか。乗組員?空母の中に入っていきました。俺?入れなかったから甲板で放置プレイ。

戦果の方は、そこそこ高いと思われる。3回攻撃しに行って、その度に甲板は大盛り

上がり。上々ね（空母感）３次攻撃隊が帰ってきたあと、なんかトップが喧嘩してた。なんでやろ。

と、まぁ、空を見上げて回想してみたり。空なんて見えないんですけどね!!

空母に訪れたらすべきこと１０選とかないんすか？暇に殺されそう。（??お前はもう死んでいる）

しりとり、それは暇を持て余した人間の暇潰し。それでは、行くぞ！

りんご。胡麻。マスク。車。……

ぱ、ぱ、ぱ、パスワード！ど、ど、ドーバー海峡！う、う、うーん、雲仙は言ったし、うーん（・ω・）コマッタゾ

何度も何度もしりとりを続けた結果、霧が晴れるまで耐久できました。飽きた。半年はしりとりを遠慮したい。語彙力皆無。

それは置いといて、俺が乗っている船は停泊中。青い海、白い雲、ここはどこ？船員は降りてしまい、現在ボッチ。居ても居なくても関係ないけどな！寂しくないし！寂し

いとか思ってないよ！ほんとだよ！

「あぁ、空はこんなに青いのに。」

～数時間後、土砂降りに遭いました。濡れませんでした。～

[??ディスイズフラグ]

生理現象がないというのは、こんなに楽なのか（悟り）

お船に揺られてあっちこっち。その度に霧が出るのは、「そういうこと」だろう。因みに今も霧が出てます。これを除いて大体３．４回出撃しました。最近は日本にいたし、割とほのぼの暮らしてた。連戦連勝。いや～、凄いね。ただ無傷とは言えず。

おっと、霧が止んだ。今回のメンバーは……２，４，６，８，むぅ、２０隻ちょいくらいか？よく見えないけど、めっちゃ大艦隊やんけぇ。なにごとぉぉぅ……。

あ、エレベーターが動き始めた。退散退散。当たらないとは言え、なんか通り抜ける感覚が気持ち悪い。

艦載機よ！大志を抱け！いや、搭乗員？乗組員？つーか、艦載機が大志を抱くって何ですかね？爆弾でも抱いてろ。希望を抱いて溺死しろ！

なんか毎回同じ話しをしている希ガス

アウトレンジ、それはリーチを活かした攻撃方法である。はるか遠くから雲に隠れて近づき、爆弾をポイっと、魚雷をポイっとする。いつ頃から通用しなくなったのかは不明であるが、同じ攻撃方法がいつまでも通用する訳がない。

ただ初期の頃は確かに戦果を上げていた。そもそも時間は流れるもの。お察しの通りである。

そして、この船の終着点。日本の空母が敗北した、あの戦い。

俺とて何も考えずにここまで来たわけじゃない。この船がどんな名前で、この先どうなるのか色々考えた。なのに、一向に分からない。提督なんだからわかって当然だと思ったヤツ、後で校舎裏な。提督だからといって実際の船には詳しいという訳じゃない！

ま、なんとなく。直感に従うなら、次の戦いが多分ミッドウェー、多分。

といっても、この船が俺の知っている歴史を歩むかなんてわからない。でも多分、こ

こで沈む。そんな気がする。あ、沈んで欲しいわけじゃない、うん。なんというか、確定された未来？みたいな。『沈まなければならない』って言うのかな？そんなものを感じる、多分。うん、多分。

それを含めて今ここから飛び立っていった人のうち何人が帰れるのか。俺が知っている歴史の中だと、ほとんどいない。

あの人には家族がいるんだろうか。どんな気持ちでいるのか。

見ているだけで色んな疑問が浮かぶ。戦争って悲惨だ。百害あって一利なしだ。いや、一利はある。軍需で好景気になる、はず。

「敵機、発見！対空砲火、始め!!」

知らない間に敵機が近づいていたらしい。機銃が火を噴く。全く当たっている気がしない。クソエイムじゃん。いや、敵が弾道予測線を目で見れる説を推そう。でなければ回避してない。まさかな、まさか対空機銃を扱い慣れてないとかないよな。ないよな？

あ、直掩隊が行った。妥当だな。ここで機銃掃射しても弾の無駄だもんな。おぉ！一瞬で落とした。なんという早技。俺でなければ見逃してるね。

直後激しい水柱が立て続けに上がる。一本は目の前、落ちた機体。２本目はその向こう５０、６０メートルくらい先、さっきとは別の機体がやられて落ちた。

ほぼ真上で空中戦をしていることもあって、皆んな上を見上げている。今までこういったことはなかったから余計に。

意識が上を向くということは、即ち、それ以外に意識が向いていないということだ。

誰も気づけなかった。音が弾け、船体が盛大に揺れる。立っていられず後ろに倒れる。手を着くこ強打を免れる。

やってしまった。あーあ、こりゃないわー。ないわ～。意識逸らして、空いた場所、ガラ空きのところに攻撃。常套手段じゃないですか！

微妙に傾いていく船体。まだ甲板は水面と平行！まだ使える！

戦闘続行！戦闘続行！

あ、なんか聞こえます。

ぬぉ！エンジン音！帰ってきたのか！救世主の登場か！

黒くて、見たことのない機体の登場です。

つまり、俺の目が捉えたのは、敵でした。

（☒―☒　）は？

こりゃ、詰みか？あ、でも周りの仲間たちが！って、居ねぇ！は？どこ行った？いつのまにかこの船しか居ないんですけど⁉？沈んだ⁉？帰った⁉？お帰りになられた⁉

頼れるものは自分だけだと言うのか。

周りの慌てよう。それが顕著だ。一度も攻撃されたことがないからだ。ほとんど想定していなかった事態が起こって落ち着きを欠いている。

直掩隊は恐らく使い物にならなさそう。自分たちが騙されたことに対して気持ちの整理がつかないだろうな。上から見たらよく見えるだろうし。もう綺麗なトラップだったろうに。

この状況でもそんなこと言えるか?（頼るものなんて）ないです。

負けたな（エヴァ感）

さっきの敵から放たれた魚雷はこの船の右舷を直撃。狙いは恐らく機関部。戦力を削ぐなら上から爆撃して甲板を壊すか、足を壊して集中的に攻めるか。この辺が妥当だろう。てんやわんやしている最中のこの一撃。この戦いの決定打だな。

甲板の前方の風避けまで行き甲板全体を眺めるように腰を下ろす。もう無理。沈むって!沈む以外の未来が見えない。

それにしてもおかしい。最初に出発した艦載機が帰ってこない。敵しかやってこないのだ。役に立たない俺の記憶だと、ミッドウェーは3日続いた。しかしまだ1日しか経っていない。一体どういうことだ?1日でやられたのか?

艦載機が帰ってこないこと。1日しか経っていないこと。ここから分かるのは、ここ

は俺が知っている世界じゃない。ミッドウェーが1日で決着した世界だというのか？

さっぱりだ。全くもって分からん。目的なんて誰からも聞いてねぇよ。行ってこいと言われたから居るだけ。俺はこの船、というより甲板から一歩も出ることが許されていない。そして誰からも見られないくせに物は触れる。

もう謎だらけ。

あーあ、退屈だ。乗組員はみんなボート乗って逃げちまった。この船も後方は吹き飛んで無くなって、残りも中腹から前半分がそそり立つように沈んでいる。広告で見たタイタニック号の沈没みたい。もちろん映画は見たことない。

さっき風除けのところに来てよかった。なんとか風除けの上に立つことができている。無ければ真っ逆さまだ。ミシミシ聞こえるあたり、そろそろ壊れそう。水面は約5メートル下に迫ってる。ここから落ちても死ぬことはないかもしれないが、やっぱり怖い。いや、俺はもう死んでるけども。

バキベリッ！と音がして足場が壊れた。手が咄嗟に伸びて何かに捕まることなく、そのまま成す術なく落下。

「わぁぁぁぁ!!」バジャンッ！

急な落水に対処できず、背中から落ちた。拍子に海水が口や鼻から入る。独特の匂いと塩の味が口いっぱいに広がって、鼻からは刺激が伝わる。
耐えられず肺から空気が漏れる。息を吐いたら、息を吸う。
ーあ、これ、ダメなやつってハッキリわかんだね
何もかもがゆっくりになる。頭の片隅でそんなことを考える暇があることに自分でも驚いた。
そして、人生2度目の溺死を覚悟して息をｓ

《君はこのままでいいのか？この先が破滅に向かっているとしてもか？》

《立ち止まれ。戻れ。手遅れになる前に。》

目を開けるとまた真っ暗であった。前も有ったぞこの展開。溺死する前に何者かの介入があったようだな。ということは……読めた。次は謎の眩しい光が現れてなんかするんだろ？次はどこで何を見るのだろう。それはそうと、俺の役割ってなんだったん？

加賀になった。

落ち度で死んでしまった。

不思議なことがあって空母に乗っていた。

名前も知らない空母の栄華と最期を見た。

なんの関係がないように見えるような見えないような。空母が関係しているように思えるような、偶々偶然のような。

おっと。どうやら時間のようだ。光が満ちてきている。このまま流れに身を任せれば解決することだ。難しく悩む必要はない。

俺は次の場所がゴールと信じて目を瞑った。

彼の決意

皆様、鳥になりたいと思ったことはございませんか？私はないです。鳥にみたいに飛んでみたいとも思ったこともありませんでした。

で、今はと言いますと。

「ｆｏｏｏｏｏ!!」

青空を駆け回っています。俺、空の上に立ってる!!空の上に立つことに若干の興奮すら押さえつけられない。すげぇ！

下にはドックと覚しき何か。なんでしょうな。

『当たりよ。ここはドック。私が造られたところ。』

「っビックリしたぁ!!」

唐突に後ろから声をかけられる。大きく肩を震わせる。ビックリして心臓が止まった。

後ろには白装束の御仁。ただ今回は前より声がハッキリ聞こえる。

『貴方、相当バカのようね。ここまでヒントがあったのに、何もわからないの？』

ムカつく。急に出てきて〝お前ってバカだよな〟って言われたら流石に腹立つ。

???「あんた、バカァ?」
はいはい、インパクト、インパクト。
「何者、ですか?」
下手大事。敬語大事。取り敢えず敬えば良いって学校で習った。
『そうね、もうすでに私の正体ぐらいわかってると思ったのだけれど。』
煽んねぇと喋れないのかよぉぉ!おぉん?煽ってんのか?煽ってんのか?煽られてやろうかぁ?あぁん!?
心で悪態付いても顔に出さない俺、マジ紳士!
『私は……』
「っ……!」
ソイツは勿体つけるようにベールを取り去る。
正直なところ、正体はとんと見当がつかなかった。
嘘だと、思いたかった。
捲られたベールの下からは非常に見慣れた顔。
整った顔立ち。ブラウンの瞳。青っぽい黒い髪かつサイドテール。
「私は、加賀。元、航空母艦加賀よ。」
あぁ、なるほど。以前に俺は、加賀の存在には気づいていた。だけど、前回、加賀が

現れたときは分からなかった。それを怒っているのか？面倒臭いヤツだな。
　言わせてくれ。あの声で分かれってのは無理がある。いや、ほんとに。変声機を介した声ってわかりづらいのよ。
「つまり、どういうことだ？俺が使っていた、あの身体は、お前のなのか？」
「えぇ。その通りよ。」
「意味がわからない。なぜ俺はお前になった？いや、お前じゃなくて、その、お前の体に。」
　別に問いたいこともあるのだが、こっちの方が気になる。俺は艦娘になることを望んだわけではない。艦娘になりたくないと、言っていないからかもしれないけれども。正直ハーレムを築きたいという願望はちょっとだけあった、ちょっとだけ。
「貴方は選ばれたの。」
「俺がぁ？選ばれたぁ？」
「私は貴方の知っている歴史ではない、少し異なる歴史を辿りました。先程の世界は、私の過去です。そして貴方は役目を果たしました。」
「お、おう。」
　なんか急に語り出した。
「まず、大きな違いは、真珠湾攻撃にて私たちは第三次攻撃を行ったことでしょう。その

後は起こった日付などの細かな違いらあれど、ほぼ同様の歴史を辿りました。詳しくは貴方が体験した通りです。」
　イマイチよくわからない。
　何故体験させられたのか、を問うと。
「今の私には言えないの。ごめんなさい。」
　さいですか。
「今までどこで何をしていた？」
「貴方が神と呼んでいる人と一緒に貴方を監視、もとい観察していたわ。とても楽しかった。」
　……。
「えぇーと、神の言うことが正しければ、ここまでの案内人はお前だよな？この後はどうするんだ？」
　何一つ案内されてないのだが。
「貴方には選ぶ権利があるの。このまま死ぬか、『私』として生きていくのか。」
「急だな。しかも、両方鬼畜。
　だけどなぁ、その、ここに来た経緯はな、えっと、沈んだからであって、体は海の中なんだわ。」

後ろ頭を掻きながら、なんと弁明すべきかを思案する。
「大丈夫よ、そんなこと。」
大丈夫だ問題ない！それは大丈夫ではないやつな。
「神の力を舐めて貰っちゃ困るわ。」
「お前は神じゃねぇだろ。」
「何？」
「いや、なんでも。」
睨まんといて。怖いから。こう、背筋がゾワゾワする。
「まぁ、とにかく。早く選んじゃいなさい。」
正直、俺はチートを活用して俺ｔｕｅｅｅｅをする気も艦娘でハーレムを作るつもりもない、嘘ついた。少しある。ただ、嫁を愛でたい。それだけだ。戦火に身を投じることも、自身を犠牲に反逆することも、俺には土台無理な話しだ。自己中心的で利己的。そんなヤツが『艦娘』なんてものになるべきではない。
でもなー、『加賀』は嫌だなぁ。でも死にたくないしなぁ。

長い長い思考の末。本心に従い、後悔のない道を選べたと思う。
「そうだな。よし、決めたわ、俺。」
こんなに期待されちゃぁ、
１０数年しか生きてないとしても
男なら逃げる訳にはいかねぇ。
自分なりに出来る範囲で頑張りますか。
「俺は『加賀』として生きる。」
これが俺の選択。
「そう。わかったわ。なら、二度と会うことはなさそうね。さようなら。烈火。」
加賀は少しずつ透明になって消えていった。いつのまにか暗い世界に戻っていた。
そこには俺が1人、佇むだけだった。

RE：START

「ん、んん……」

足が冷たい。そして遠くからすっかり聞き馴染んだ海の音。ここは……？

恐る恐る目を開ける。

確か俺は燃料が切れて、沈んだはずじゃ……　いや何かあったような気がする。とても大切なことが。

とりあえず立とう。よっこらせと振りをつけて立つ。

少し眩暈がしたが体調は悪くない。どこかで人間目の高さから見える水平線までの距離は3，4キロ程と聞いたことがある。すなわち、今俺がいるこの場所から目の前3，4キロは何もないということだ。後ろ？崖ですが？

「どうすっかな。」

とはいっても、衣食住の確保が最優先か。誰か人がいればいいのだが。島の探索、やりたくねぇよ。俺、知ってるよ！日曜7時から放送してるアイドルが島を開拓するやつ！最初なんもねぇじゃん！あれで「暮らせ」とか言われても「ヤダ」って答える。しかも、ここにはワタクシ＝オヒトリ。帰りたい。日本に帰りたい。わけわかんないところ

より家に引きこもって暮らしたい。
「デスヨネ。マッタクモッテドウカンデス。」
「ねー。ここってどこなんだろうな。」
　この海の先にはきっと自由な国があるんだ。だから俺、そこを目指すんだ。
「ア、アメチャン、タベマス？」
「貰おう。」
　うめぇ。糖分だよぉ。ありがてぇありがてぇ。
　……　は？
「ヲイ、何故お前がいるんだ？」
　肩に座っている、妖精さんを捕まえる。
「ナゼミテルンデスゥ!?」
「……」
　これはもしかしてｂａｄ　ｅｎｄ？
「ｇｏｏｄ　ｅｎｄダス」
　お、おう。どこがなんやろな。てか「だす」ってなんだよ。それよりも、それよりも

だ。

「お前、何してんだ？なんでいるの？」

いや、ほんと。なんで？言ってたよね？艤装と一緒に消えるって。

「アナタ、ワタシニナマエツケタ」

なんで片言？前から片言だったけれども。名前？

「それ、なんか意味あるの？」

「ナマエヲツケルトハ、ソンザイヲミトメルコトデ・・・」

要約すると、この世の全ては誰からか認識されなければ存在する事ができない。妖精さんは神秘の塊。存在するかどうかすら不明。俺が［ハル］と名付けたことで存在が確定された。だからぎりぎりここに居るらしい。

うん。うん？うん？じゃあ、全員に名前付ければ増えるのか？どうなのさ？

「ナマエヲツケルトキ、レンドヲタイカニシマス。」

はえ～。なんで俺はできたんだ？練度あったの？覚えてぬ（打消）

～～～～～～～～～～

ぐるっと見てきた。島はそんなに大きくない。小さい島が２つ繋がっている。繋がっているとはいえ、潮が満ちたら渡れなくなる。両方とも人がいた痕跡はあるが、大分昔にここを去っている。溶岩質で雨風は凌げそうにない。食料の確保を急がないと。

「なぁ、この状況に対してどう思う？」
「アキラメ」
「死ねと申すのか？」
「セヤデ」
　力いっぱいに海に向かって投げた。放物線を描いて海に突っ込む様子はハンドボール投げを思い出す。
　海ねぇ。釣りしようにも餌ないし、まずここに魚がいるのか。
　あ、そうだ（唐突）
「おーい、はるぅぅ！」
「タダイマ」
「びっくりしたぁぁ!!???」
　こっわ。急に、ぼんっ、て。こう、忍者みたいに。
「ヘッヘッヘ」
　投げたのはすまんて。許してちょ。
　それでですね、妖精さん印の非常セットだっけ？あれ、ある？
「コレ」
　服の下から身の丈の数十倍はあろうかと思われる箱を取り出す。ｏｈ，四次元ポケッ

ツ・

見た目はそこら辺にあるような段ボール。一辺が1メートルちょいの立方体。上面に??で妖を囲ったマークが入っている。

「開けても?・」

「オケ」

ゴマダレ～（ゼルダ感）

まず目に付いたのはところてん作るやつみたいな辺なヤツ。プラスチック製で結構重い。

「なにこれ?・」

「ドウゾ」

あ、説明書。どうも。

なになに、浄水器?泥水を飲める程度に浄化してくれるんすね。それが４本。合計で泥水１００リットルまで浄化可能と。へー。有能。

次。これは鏡か?なんで?

「アンシン　アンゼン　プラスチックデス。」

問題はそこじゃない。確かに割れる心配はないけど、そこじゃない。今はそこじゃないよ。

「ん？」
おかしい。見た目の体積と実際の質量が合ってない。なんなんだ？
手を突っ込んで引っ張り上げる。
「こ、これは、まさか？」
「ブルーシート⁉？」
セリフをとるなよ。
内容量の８割がブルーシートとか。使えない非常セットだな、おい。

番外編という名の時間稼ぎ

蒼龍の過去

誰も僕のことを理解してくれなかった。

学校でも家でも一人で過ごしていた。親は共働きで帰りが遅く兄弟がいなければ仲の良い友達もいなかった。

誰にも迷惑を掛けまい、そう思い人並みより少しぐらい勉強した。

親とはほぼ関わりを持っていなかったがそれなりに生活することができた。家事の大半は独学である。一人暮らしをしているが、多くの家事はこの時に覚えた。

小学生、中学生そして高校生になった。

そこで僕は初めて———を知った。

高校生になっても今までと同じ毎日を繰り返す。そう思っていた。

「お前、ゲームはするか?」

どの時間の休み時間なのか定かではないが、自席で読書をしていると横から声が聞こえた。

振り向くのも億劫だったので素っ気なく否定の意を伝えた覚えがある。

大概の人なら「あ、そう」とか、「ふ～ん」みたいな反応をするだろう。勿論、僕も思った。
だが彼は違った。
「なら、始めよう。まだ間に合うぞ、少年。」
驚いた。
どんなヤツなのか気になり、彼の顔を見た。ソイツは満面の笑みで僕を見ていた。

「なぁ、どうしてキミは僕に興味を持ったんだい？」
「やめろ、喋んな……。」
痛いから、やめてよ。
「こんな、馬鹿はキミに釣り合わないのに？」
「あぁ、そうだ！お前は世界一馬鹿だ‼？あと少し、あと少しだけ我慢しろ！」
意識が……　朦朧と、して……。でも……、これだけは……　伝えない……
と。
「もう……いいよ。ありがとう。今まで、キミが友達で、良かった。ーーー。」

「おい！まだ死ぬな！……　チクショォォォ！」

バイバイ。僕の最初で最後の友達。

ーーーーー

ーーーーーーーー

体に働く重力が無くなったと思えば、再び重さを感じた。

目を開ければいつもの天井。

飛龍は隣で寝ていた。

「また、あの夢か。」

最近、同じ夢を何度も見る。1人の孤独な男の短い命の終焉。決して変わることのない物語の結末。名前すら知らない、その男。彼の苦しみは日に日に現実味を帯びてくる。

この夢の何が私に関係しているのだろうか。

私は艦娘として二度目の生を得た。当時は深海棲艦との戦いが激化する前で、大変な毎日だったのを鮮明に覚えている。一月に1人は殉職していた。今より『死』と隣合わせだ……　っ……　た……。

急に……　頭が、なんで……　いつも……？

「ひ、飛龍、助け……　て……。」

咄嗟に私は寝ている飛龍に助けてを求めた。
いつだって飛龍は私を助けてくれた。
「全く、そろそろ学んだら?」
起きていることに驚いたが、飛龍は優しく私を包み込むように抱きついてきた。
あぁ、飛龍にハグされると落ち着く。
夢はすぐに不明瞭になり、記憶から消え去る。でも、この夢は消えない。何もかもが思い出せなくても『彼』の最期は頭から離れること無く、頭に巣食っている。
「過去の出来事を思い出そうとする度に頭痛がするんでしょ?だったら思い出そうとしなければいいじゃん。」
「いつまでも過去から目を背ける訳にもいかないんだよ。」
なんで、過去を思い出そうとする度に頭痛がするの?なんで?なんで?
「蒼龍、私が付いているから。」
今隣にいる飛龍は私の唯一の理解者だ。この世界の全ての飛龍より。
この感情、この気持ち、ずっと前に感じたことがある。でも、一体何処で?

数時間後〜執務室〜

「今回の作戦は、なんていうか、いつも通りだから「意訳、頑張れ。ですよね、提督？」セリフを取るな。」

提督のセリフに大淀が被せる。

恐らく、ここにいる全員が思っていることは一つ。

「このミーティングは意味があるのか」だ。

今回の目的地は西方海域。ステビア海アンズ諸島沖。目的は泊地水鬼を撃退することです。私たちがいる横須賀鎮守府は太平洋側を中心に日本全国を守っている。前線で戦うこともあるけれど，今回のようにお手伝いとして出向する方が多い。

泊地水鬼は空母の航空戦力が要になるため，私たち二航戦が編成される。一航戦？あの二人は資材の面で大変なことになるから……。

この作戦は一年に数回，多い時で１０回以上行うので多少は慣れている。なんでも，深海棲艦がよく集まるらしい。

メンバーは旗艦榛名さん。伊勢さん。私と飛龍，摩耶さんに響さん。響さんはすでにＶｅｒｎｙｙ　つまり改二になっています。

「まぁ，なんというか，代わり映えのないような編成と道のりですまん。何かあれば通信機で頼む。それでは，元気で頑張ってこい。」

提督の激励に私達は敬礼を返した。

ーーーーー

横須賀を出て早２４時間。リンガ泊地に入港した。そこにはリンガ泊地の提督と軽巡数隻と駆逐艦数十隻がいる。水雷戦隊による哨戒がメインらしい。

「旗艦榛名，以下全員揃いました。」

榛名さんの言葉と共に敬礼をする。

「うむ，毎度毎度すまない。戦力の優先度は最前線だから君たちの支援は必要不可欠なんだ。」

リンガ泊地の提督はパッと見２０代後半だが実際は３０代後半という若作りで，コアなファンもいるとか，いないとか。

「作戦は君たちに一任する。私が口を出すのは難しいしね。それじゃあ，行ってもらう。健闘を祈る。」

彼の敬礼に「はい」という言葉と答礼で返す。

「それでは失礼します。」

一人ずつ退室する。

榛名さんが退室しようとしたとき提督が声を上げた。

「あぁ，最近，深海棲艦の様子が奇妙らしいからそれだけは気に留めといてくれ。」

奇妙？深海棲艦という存在が奇妙では……。でも人間からすれば艦娘(私たち)も同じようなものか……。

蒼龍の過去２

「皆さん，忘れ物ありませんか？行きますよ？」

２０００（フタマルマルマル）

各々の準備を済まして堤防に集合完了しました。帰ってこられるのは大方明日になると予想されるので通常の出撃より荷物が嵩張ります。

ところで響さん、その荷物はなんです、って、まさか、お酒ですか！

「蒼龍、これはお酒じゃなくてロシア産のミネラルウォーターだ。お酒じゃないから。」

私の視線に気付いたのか荷物について教えてくれた。

なるほど。水分は大切ですし、「お酒じゃない」と２回も言っているようなので〝ミネラルウォーター〟と信じたい、心の底から。

「こほん。響さん、戦闘中で飲まないで下さい。分かりましたか？」

「なに、私もわきまえているさ。危険な状況で飲もうとは思わないからね。」

戦闘が続いて禁断症状が出た、なんてことは嫌だなぁ。

どうやら響さんがしゃべったことにより少し騒がしくなったようだ。

「飛龍、あれはお酒だよね？」

「ロシアのミネラルウォーターはウォッカだからね」
「改二怖い」
「ちょっと皆さん、静かに、して、下さい、ませんか?」
「「ひぇ!すいません!」」
榛名さんが一番怖い。

リンガ泊地を立ってから幾らか戦闘しつつ迂回もしながら奥へ進んでいる。
ただ、言葉に出来ない違和感を感じる。リンガ泊地の提督が言っていた深海棲艦の活発化とは違う何かを。

「電探に探あり。3時の方角、艦載機多数。」
伊勢さんの言葉で我にかえる。今は戦闘に集中しないと。
「艦戦部隊、発艦始め!!」
飛龍が先に発艦し、遅れて私も矢を放った。放った矢は艦載機に変わり、敵に食らいつく。
しかし、紫電11型が、ゼロ戦が、羽を奪われ海面に激突。
圧倒的な物量の前では練度は風の前の塵に同じ。

見るも無惨なそれは私にはどうにもできない。
「対空砲用意!!うてぇ!!」
無我夢中で回避をとり、帰還した艦載機を補給が終わった時点で再び放つ。ただただ防戦すするだけ。榛名さんと摩耶さんが手伝ってくれてはいるが、敵があまりにも多過ぎる。
艦戦と対空砲を抜けた攻撃が降り注ぐ。
気づけば右腕から血が出ている。
「くっ、こちら飛龍！艦戦消耗率３０％超！」
「こちら蒼龍！３５％以上消耗しています！」
消耗がこれまでより早い。それに加え敵艦の居場所が分からない。母艦を倒せば有利に運べるのに……。
「伊勢さんより打電、『ワレ　テキ　キドウブタイ　ハッケン　セリ』とのことです。もう少しの辛抱ではないでしょうか？」
「んなこと、言ったてよぉ、見つけただけだぜ？ほっ。まだまだ掛かると、ほらよっと、思うけどなっ！」
通信越しに色々聞こえる。
流石は戦艦、三式弾は強いね。私たち空母には劣るけど。

「蒼龍から邪な感情が伝わった気が…。」
「そんなことないよー。」
良い意味でも悪い意味でも心が通じてしまう（，＿，）

紆余曲折ありまして、何とか空母ヲ級改を倒しました。断末魔を遥か彼方に聞き、次の予定について共有する。
「そろそろ日が完全に落ちるため近場で夜明けを待ちたい」「このまま進撃して夜明けと共に不意打ちを実行する」この二択で意見が対立している。
ふむふむ。私は前者かな。敵に会うと何も出来ないけど奇襲で有利を取る価値はあると思うんだ。
「空母がいる、夜は危険過ぎるかな。私だって航空戦艦だから総戦力は半分、までとは言わないけど少なくとも3分の1以上にはなる。」
「それでも、アタシとか響がいんだから夜戦戦力はそんンなに落ちねぇよ。」
「そうですね、これに関しては空母の御二方に聞くべきかと。」
へ!?そんなこと言われても…。どっちでもいい、としか答えられない。
「私は少しでも進んでおきたいかな。」

飛龍がそう言うなら私も。
「私も同じ意見かな。」
「わかりました。この意見を踏まえて考えると、このまま進撃すべきですね。それでは進みましょう」
複縦陣を組む。夜が訪れたら自分の身は自分で守らないと。深海棲艦はいつ現れるか分からないのだから。

結果から言うと、現れなかった。現れないに越したことはない。
今は少し遠回りして最奥部より約１０キロ離れた島で各々仮眠をしつつ明朝を待っています。
約２時間後、西の水平線から光が立ち昇った。その光はだんだん光度を上げ、海面に乱反射する。あまりの眩しさに目を背ける。皆んなはいそいそと準備をしている。
榛名さんを先頭に横一列並んだ。
「艦隊、抜錨します。」
榛名さんの一声で纏う空気が変わった。
「「索敵隊発艦始め。」」
放たれた矢が彩雲へと変わりボスがいると思われる方向に向かう。

６分もすれば通信がくる。その機体を意識して「眼」を開く。
飛行場姫と護衛艦隊が雲の隙間から観測できる。雲の下から機銃弾が飛んでくる。
「私たち」の存在に気付いているようね。
「こちら蒼龍。敵艦隊発見せり。２時の方向、浮遊要塞３体駆逐級２隻。」
「分かりました。私、伊勢さん、響さんで突撃するので麻耶さんは対空防御をお願いします。」
金剛組の名は伊達じゃない。こっわ、金剛組こっわ。
それより先手必勝。敵の位置がわかればこっちのもんよ。
「第一次攻撃隊発艦始め！」
数が少なくても精鋭ってね。同調して目標を雲の切れ目から眺めてるけど、遠くからだと見えにくいね。赤い海に黒の塊。配色、どうにうかならないのかね？
ん？後方から爆発音・・・？
あらら、待機されてたか。
《攻撃隊の生存を優先されたし》
お、うまい具合に回避してる。速い子は泊地水鬼に攻撃成功。いいじゃん。
視界を戻すと麻耶さんが暇そうに私を見ている。私になにか用事でもあるのかな。
「な、何ですか？」

「いや、あー、少し昔を思い出してな。」
「昔、ですか?」
「覚えてない、か。なんでもねぇ。忘れてくれ。」
「はぁ。」
「麻耶ばかりずるい～。私も蒼龍としゃべる～。」
「あんたは、いつも一緒にいるでしょうが。」
海面が濃い赤色に染まっている。何回見てもこの海は慣れない。血の海に立っているみたいで、底に死体が群がって今にも足を引っ張られそうで、落ち着かない。
「どうしたの、ボーっとして?」
飛龍が心配してくれる。そのことが無性に嬉しい。
「大丈夫、ありがとう。」
私は前を向く。同時に艦載機より打電。敵の制空圏内に入ったのだろう。
榛名さんの指示を仰がなくとも何をすべきかは、わかる。戯れはなし。
「稼働機、全機発艦、始め。」
ここからは仲間を守る、戦いである。
迫り来る航空機。それが飛行場姫に近づいていることを物語っている。
そして、遂に、水平線に、見えた。太陽を背に、絶好のポジションだと思う。向こう

からしてみれば太陽が邪魔で巧く狙えないと予想している。
相変わらずの航空攻撃。あなたたちの航空機は無尽蔵ですか？
ーーーーーーーーーーーーー
残る敵は飛行場姫だけ。未だ航空機を飛ばしているから、中破していない。
硬いったらなんの。近づくのも容易じゃない。上下からの熱が邪魔をして目が眩む。
艦載機は疲労で使えないし、弾薬も少ない。
「主砲、斉射！」
当たれ！
榛名さんが放った弾が、放物線を描き、頂点に達する前に散開する。
着弾。同時に爆発が数回。煙が広がり、隠れる。
だけど、数秒もすれば晴れる。
飛行場姫は笑いながらこっちを見ている。艤装は曲がり、欠け、体勢は３０。ほど傾いているように見える。さっきの爆発音は何だったのだろうか。
これを好機と見て魚雷を放つ。私たち空母は敵艦載機の掃討をする。
ここで決めなければならない。
巨体が魚雷から逃げられるはずもなく、低い音とともに水柱が初めに５本、次に３本上がった。

ダメ押しに戦艦による砲撃。
彼女は怨嗟の声を轟かせて、黒の煙を吐きながら、海に帰った。
空には私たちの艦載機が飛んでいる。
やっと終わったぁー！これで大丈夫。早く帰ろう。
少し後ろにいる飛龍に笑顔でピースをする。
飛龍は微笑を浮かべたが、すぐにその顔は恐怖に染まった。
私は気づかなかった。倒したという思い込みで気が抜けてしまった。
「蒼龍！後ろ！！」
飛龍が私の名前か叫ぶも、遅い。振り返って見えたのは、私の目には落ちてくる弾丸が、ただ、ゆっくりと、落ちてくる、だけ、だった。
彼女は水面に倒れた。手に持っていた弓はぷかぷかと浮いている。
飛んでいる間に弾は減速しており、また、艦載機が身を挺してくれたおかげで一命は取りとめた。が、重症。頭からは血が流れ、彼女の息は絶え絶えになっている。
仲間が駆けつけ各々彼女の名を叫ぶ。
「あぁ……、ぁあ……。」
苦悶の声を漏らす。
榛名が蒼龍を背負い、弓は飛龍が持っているいるようだ。

「こちら伊勢！蒼龍、大破し沈みかけている模様！至急助けを乞う！」

「テセウスの船」

あるところに一隻の木造船があった。その船を「修理」し続けた。ここでの「修理」とは古くなった木材を新しいものに交換することだ。

船の１０％を修理する。これは元の船と言える。修理率を増加させよう。

気づけば船の９９％を修理した。だが、これは元の船と同一物である。修理しても船自体には何も変化が無いからだ。そのため、全てを修理した場合，これも同一の船と言える。

本当にそうだろうか。本当に「同じ」船なのか。

船の全てを修理した場合，新しい船を別に作ったことと同じである。つまり，元の船を修理し続けると、全く別の船に近づくのである。しかし船は同一である。

つまり、修理前後でイコールが成り立つにもかかわらずノットイコールが成り立っているという矛盾が発生している。なんとなく理解して頂ければ幸いだ。

［閑話休題］

蒼龍に砲弾が当たってから丸2日以上。彼女が目を覚ます兆候は見られなかった。呼吸は安定。脳にも異常は見当たらなかった。そのため、しばらく様子見が続くと思わ

れた。

ーーーーーーーーーーーーーー

「うぅ、ん。」

「え!?」

此処は？確か私は敵の直撃を受けて、それから…　どうしたっけ？何か大切なことがあった気がする。

「蒼龍!!蒼龍!!」

そう…　りゅう…、私／彼女の名前だ。この声は…

「蒼龍、声が聞こえる？私の声が聞こえる？」

「きこえ…　るよ、ひ…　りゅう…」

あぁ、そうだった、彼女はそんな名前だった。私／彼女の相棒、忘れる筈がない。

飛龍／彼女は泣いている。ボロボロ泣いている。無理もない。それだけみんなに迷惑をかけるようなことしたという自覚はある。

「ごめんね……飛龍。迷惑……かけたね。」

「よかった、よかったよぉぉ」

「本当に、ごめん」

どうやら、泣き止むことはなさそうだ。巧く力が入らない手を使い、なんとか上半身を起こした。

飛龍は安静にするよう言うが、ずっと横たわっているのは失礼な気がしてソワソワする。

しばらく、お互いに沈黙を貫いた。気まずい。しばらく使っていなかった声帯をなんとかして動かす。

「ところで、ここは?リンガ泊地?なら助けてくれたお礼を・・・。」

重い空気が未だに立ち込めている。なんで、ずっと黙ったなの?

番外編

～奇跡の対談～

「とある男の転生物語」作者　烈風６０１空さん

「とある男の転生物語」主人公　加岡烈火さん

――――今回のお客様は「とある男の転生物語」の作者である烈風６０１空さんと、その主人公の加岡烈火さんです。

烈風６０１空（以後　作）「こんにちは。今日はよろしくお願いします。」

加岡烈火（以後　主）「こんにちは。よろしくお願いします。」

――――そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ（笑）それでは御二人の誕生日と血液型を教えてください。

作「●月×日のやぎ座のＡ型です。」

主「△月■日のしし座のＯ型です。」

――――意外ですねぇ、烈風さんって大雑把なところがあるのでＢ型かと。

主「確かに。鞄の中がいつもごちゃごちゃしてますね。」

作「失礼な、ごちゃごちゃしているのは部屋だけですよ。」

主「しとんかいっ！」

――――いやー、仲がいいですね。

作「そうですかね？」

主「こいつと一緒にしないで下さい、頭の回路が残念な人と。」

作「おめぇ一回爆発しろやっ!!」

主「事実だろ？」

作「すいません。少し本題から離れたんで次に行って下さい。」

主「無視するな!!」

――――分かりました。まぁケンカする程なんとやらと言いますし、仲がいいのは良いことですよ。

～～～中略～～～

他愛もない会話やそれに準じる何か。

――――結構似ているところがあるんですね。それにしても御二人の意外な一面を見れて嬉しいです。

それでは次の質問に答えて下さい。

１あなたにとって平成とはどんな元号でしたか？
２新たな元号である令和をどのように過ごしたいと思いますか？
主「そうですね、そもそも私たちは平成という時代しか生きてませんし元号が変わるっていう実感がないっていうのが本音です。でも、私にとって平成というのは生まれて場所のようなものです。生まれた場所は一つしかないので、その愛着が湧くっていうか、大切にしようと思うみたいな。言葉に表すって難しいですね（笑）」
作「いきなり丁寧語とか今までの会話で素顔バレバレだと思うよ。」
主「う、うるさいな。そういうお前はどうなんだよ。」
作「１９４１年に太平洋戦争が始まって１９４５年に終戦。そんな昭和の時代から平和の世の中になった平成。でも世界のどこかで戦争は続いています。」
主「お、おう。」
作「その戦争が終わることがなかったのが少し残念です。平成とは災害に魅入られた年ですね。阪神・淡路大震災を始めとする大規模な震災に見舞われ、多くの人々が悲しみを負ったというのが印象的でした。」
主「つ、次は令和についてですよね？やはり令和といえば初めて日本の国書から選ばれた元号なんで日本が代表する方々が世界で活躍して欲しいです。」
作「大規模な争いや災害が起こらず平和だったらいいですね。」

――――貴重な意見、ありがとうございます。続いてですが、ここで烈風さんにお願いがありまして、「とある男の転生物語」の裏設定をお話ししてもらいたいのですが？

作「いいですよ。お安いご用意です。

――――ありがとうございます。

作「裏設定って言ってもそんなにないよ。」

主「自分の裏設定なんて聞きたくない。」

作「じゃあ烈火くんから行こうか。」

主「ぎゃぁぁぁぁぁぁ。」

作「第一、烈火君の名字は原案では加岡ではない。」

主「え？」

作「書き始めた当初は鈴音だったけど、とある小説のキャラで鈴音ってあったから急遽変更しました。」

主「へ、へ～～。」

作「あ、題名に〝転生〟ってあるけど転生要素０だし。元ネタは〝起きたら異世界〟なんで１話から全く別の話しになっちゃった。テヘ。」

主「わ～、女子がしたら可愛いのにコイツがすると気色悪い。」

――――面白かったです。あ、そろそろ時間ですね。これが最後の質問です。確か、艦これの金剛さんが好きということでしたね。最後の質問はその金剛さんについてです。

主「おお～～。」

作「気になりますね。」

――――――これから数分間あなた方だけで金剛さんについて話あって下さい。それでは、どうぞ。

作「なるほど。」

主「金剛さんについてか…。」

作「この前改二丙が実装されたけど資材が予算オーバーだった。」

主「へ～。…　って、改二丙?」

作「? 知らないのって、あぁなるほど。確か改二丙が実装される前にお前は死んだな。」

主「Ｏｈ～ＮＯ～」

作「ドンマイ。」

主「見たかった…。」

作「ご愁傷さま。物語が進めば出てくるからそれまで待っとけ。」
主「早く物語進め～～。」
作「今回が今年最後の投稿になるんで。」
主「オワターーーーー。」
作「さらに、予定が結構ズレたんで出てくるのは不明。」
主「やめろーーーー!!」
作「できるだけ早く多く書くので応援よろしく。」
――――はい、時間です。今日はありがとうございました。
作「ありがとうございました。」
主「ありがとうございました。」